

# 冬山登山靴の思い出

藤井 諭

9年間履いた冬山登山靴が、今年のゴールデンウィークの登山中についてパッキリと剥がれてしまった。私にとっては長年の雪山登山を支えてくれたパートナーである。固くて重い、キックステップやアイゼンワークの繰り返し、雪中や雨中の山行に、普通は6年と言われる中9年間も耐え続けてくれた。それがこの5月の鹿島槍ヶ岳への途中、爺ヶ岳を越えたところで右足が突然パッキリと開いてしまった。

しかしそこは北アルプスの真っ只中、この靴で進むしかなく一瞬我を失った。ザックにホワイトテープを持参していたことを思い出して取出し、靴の前半分を所々カットしながらグルグル巻きにして固めた**(右写真)**。このテープは強力でキックステップしても大丈夫、アイゼンを装着しても変わらず使えることがわかった。これによってピンチを逃れ、予定通り鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の縦走を果たすことができた。登山靴として力尽きたわけだが、今まで私の雪山登山を支えてくれたパートナーに感謝する気持ちで、この靴の今までの経歴を振り返ってみる。



13年前に遡り2005年5月に単独で立山に登った。そこは真っ白で美しく雑踏のない静かな別世界、白と黒の混ざった雷鳥たちの楽園だった。これで残雪のアルプスにすっかり魅せられてしまった。それから毎年、GWの雪山登山が自分の大きな目標となった。2006年5月には涸沢から奥穂高岳に登ったが、アタックは冬山のように厳しく危険も伴った。2008年5月には八ヶ岳を、ピッケル・アイゼンで赤岳から天狗岳まで縦走した。この頃から良い冬用登山靴の必要性を痛感し始めた。2009年に東京水道橋の“さかいや”で老店主に奨められ、ケイランドの冬靴を12本爪アイゼンとセットで購入した。それからこの靴と共にした、GWの雪山登山を振り返ってみる。

- ① 2010年5月 五竜岳から唐松岳縦走
- ② 2011年5月 燕岳から常念岳縦走
- ③ 2012年5月 鳳凰三山縦走
- ④ 2013年5月 霞沢岳、西穂独標
- ⑤ 2015年5月 立山縦走、奥大日岳
- ⑥ 2018年4月 鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳

① 奥穂高岳以上に難しい山行だったかったかもしれない。遠見尾根からの五竜岳は長くて遠かった。五竜山荘での朝、五竜岳の山肌はピンク色に染まった。山頂からのパノラマは絶景で、目の前に真っ白で巨大な鹿島槍ヶ岳が聳っていた。いつかはあの山の山頂に立ちたい！と思った最初の時だった。唐松岳への縦走は滑落の怖れのあるト



ラバースの連続、“牛首”は鎖が雪に埋まった岩場でアイゼンをガチャガチャさせて緊張が続いた。しかし最後の八方尾根の下りは別世界のように楽、緊張から解放されて優美な五竜岳（上写真）を振り返りながらルンルン気分だった。

② 残雪の表銀座縦走は、①～⑥の中では最も余裕があり楽しかったと思う。燕山荘での日の出は素晴らしかった。燕岳の雪面は朝日でバラ色に染まった時（右写真）は感激！向かいの水晶岳から槍ヶ岳の稜線もピンクに染まり、それが刻々と変化して映像ドラマを見ているようだった。そして残雪の槍ヶ岳と穂高連峰を眺めながらの稜線万歩だ。唯一緊張したのは、常念岳登頂後の一ノ沢への下りだった。急斜面の沢底への下りは滑らないよう、ピッケルとアイゼンを効かせて一步一步緊張し、滑落停止に備えた。ワカンとストックで下る登山者がいたのには驚いた。この急斜面ではアイゼンでの足場確保とピッケルでの安全確保は不可欠だ。下山後、一度は訪れたかった豊科の“田部重治記念館”を鑑賞できたのはラッキーだった。驚くほど精密な蝶の絵には感動した。



③ 前日の大雨で、夜叉神峠への道が通行止めとなってしまった。しかたなく芦安から、増水した沢沿いの旧道を慎重に渡渉しながら登った。予定が大幅にずれて峠小屋へはヘッドランプの登りとなり、心配した小屋番が途中まで迎えに来てくれた。こんな日にわざわざ入山する者は誰もおらず、宿泊客は私一人の貸切だった。翌日薬師岳までは緩やかな登山道で、残雪の白峰三山が美しく気分が良かった。途中の御室小屋付近でスマホの案内スポットがあり、地図のダウンロードとGPSトレースの取得ができた。“山旅ロガー” GPSは安全確保のための生命線だ。観音岳から鳳凰小屋への近道は急な下りで滑落の危険が伴い緊張の時間だった。翌日、地藏岳（右写真）への登りは雪面がカチカチでピッケルが刺さり難く、足を踏ん張ってアイゼンを効かせ登った。地藏岳からの白くて優美な白峰三山・仙丈岳と、黒くて厳つい甲斐駒ヶ岳の眺めが対比的だった。最後の御座石鉱泉までの下りは、疲れからか年からか？とても長く感じた。今回は出発からトラブルだったが、ピッケル・アイゼンとこの冬用登山靴のお陰で、計画通りに縦走し無事に下山できたと思った。



—後編につづく—